

令和5年度あきた型学校評価シート
(秋田県立聴覚支援学校)

評価領域	学習指導
------	------

重点目標	日本語の力、学力の向上を目指し、質の高い教育活動を推進する。	P
現 状	<ol style="list-style-type: none"> 1 昨年度までICT活用推進モデル校として研究・実践に取り組んできたことにより、対話の工夫や言語力の育成にICT機器を有効に活用できることが教員間で実感されている。また、聴覚障害教育に係る専門性に関する研修意欲が高く、授業づくりとの連動の中で指導技術を高めたいという研修ニーズがある。 2 聴覚障害の程度の違いに加え、他の障害を併せ有する幼児児童生徒から就職・大学進学を目指す生徒までの幅広い実態に応じた、きめ細やかな指導や教育課程の編成が求められている。 3 在籍数の減少に伴い、幼児児童生徒が同年代の仲間と対話しながら学ぶ機会が乏しくなっている。 	
具体的な目標	<ol style="list-style-type: none"> 1 研究における取組を中心に、一人一人の実態に応じた指導方法や言葉を育てる工夫をすることで、深い学びにつなげる実践を蓄積する。 2 聴覚障害、教科指導、重複障害に関わる研修の機会を確保し、多様な実態に対応できる教員の力量形成を図る。また、学部間の連携や情報交換を密にし、最適な教育課程編成を模索する。 3 居住地校交流、難聴児童生徒との催しを通じた交流、オンラインによる交流など、様々な場を通して同世代の仲間と接する機会をつくる。 	
目標達成のための方策	<ol style="list-style-type: none"> 1 言葉を身に付けるための活動を学校生活全般で行う。STによる言語発達評価の分析や助言等をもとに、個々の実態を的確に把握し、効果的な言語指導が行えるようにする。また、幼稚部から高等部まで発達段階を踏まえ、ねらいや指導内容の関連性・系統性を全校職員で確認する。 2 各種研修会や互見授業を通して学校や学部を越えて広範に学び、OJTの場面を大事にする環境をつくる。各年齢段階で必要な事項を学部を超えて協議し、学部間の共通理解と連携を図る。 3 居住地校交流の目的などについて担任や保護者が確認・検討する。また、県内難聴児童生徒の「つどい」やオンラインによる教科交流を通して、校外の児童生徒と触れ合う機会をつくる。 	
具体的な取組状況	<ol style="list-style-type: none"> 1 学部を主体とする研究班で、授業実践を通して幼児児童生徒についての見取りを共有し、対話の工夫や授業の振り返り、授業記録、 	

	<p>諸検査等を活用した検討を積み重ねた。研究会や研修会では、幼稚園から高等部までの長期的な育ちの見通しの上に、発達段階を踏まえ、ねらいや指導内容の関連性・系統性を全校職員で確認した。</p> <p>2 有志による学習会「専門性プロジェクト」への参加率がひじょうに高く、幅広い内容を学び合った。自立活動に関わる学習会や委員会で、幼児児童生徒に育てたい力と手立てについて焦点化して協議され、共通理解につながった。</p> <p>3 新たな居住地校交流の開始、「つどい」への在籍児童生徒の参加奨励、聴覚支援学校とのオンライン交流の開始を行った。</p>	
達成状況	<p>1 幼児児童生徒について育てたい力を各学部で分析し、対話の工夫や授業記録、振り返り、検査等の評価を活用しながら指導実践を積み重ねた。</p> <p>2 「専門性プロジェクト」を自由参加型にしたことが、主体的な参加姿勢につながった。同僚の指導場面から学び取ったことを学部等の炉辺で話題にし、協働的に学び合った。</p> <p>3 新規に居住地校交流を開始した生徒や、オンラインで他県の聴覚支援学校と共同学習を行った生徒は、校内では得られない刺激を受け、対話を深めることができた。</p>	



自己評価	(評価) B	(根拠) 1 学校評価における「日本語の力や基礎学力の向上」の全体平均は3.67と高評価であった。 2 学校評価における「発達障害や知的障害等についての理解・指導」の全体平均は3.00で、やや不十分だった。	C
------	-----------	---	---

↑ 評価基準 ↓

A : 具体的な活動がなされ目標を達成できた
 B : 具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
 C : 具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない



学校関係者 評価と意見	(評価) B	(意見) 全国高校生手話パフォーマンス甲子園への出場を核にした表現活動による生徒の学びについて、肯定的な評価を受けた。在籍数が減少し、個別学習が増える状況で児童生徒の学びをどのように構成するか、更なる工夫が求められることが確認された。	C
----------------	-----------	--	---



自己評価及び 学校関係者評価に基づいた 改善策	1 一人一人のニーズに応じた質の高い教育の実現のため、研究・学習会・互見授業の有機的な活用、日常的な情報交換の活性化をさらに推進し、聴覚障害教育と他の障害に関する専門性及び指導力の向上を図る。小中学校の教科研修会や知的障害特別支援学校の研究会、エリア内での授業研究会などの機会も有効に活用する。	A
-------------------------------	---	---

2 在籍数の減少を受け、校内における最適な教育課程編成の検討と校外とのつながりを生かした交流機会の継続・発展を図る。